

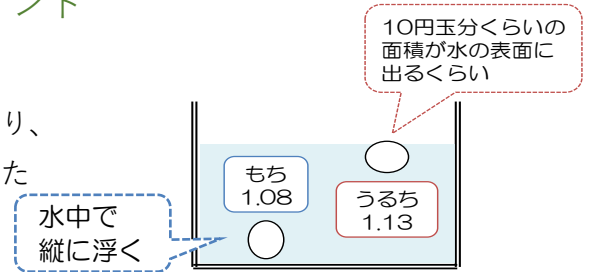
🌱 営農支援情報

水稻種子予措のポイント

◆塩水選◆

種子の比重を利用して病害や未熟な軽い種子を除くことにより、発芽を揃える効果があります。食塩または硫酸で品種に合わせた正確な比重液で行ってください。

※消毒剤が塗布されている種子には実施しないでください。



参考：卵を用いた比重液の目安

◆種子消毒◆

苗立枯細菌病・もみ枯細菌病・ばか苗病・いもち病など種子伝染性病害の防止を目的とします。また、消毒施設や育苗施設の清掃も重要です。

温湯消毒：60℃約10分浸漬。温度・時間厳守。生物農薬と組み合わせると効果大。もち品種は不可。
 薬剤消毒：テクリードCフロアブル、ヘルシード乳剤等。無消毒種子に必ず行う。薬液の温度は10℃以上。

◆浸種◆

種子の発芽を揃えるため水を吸収させ、発芽阻害物質を除く作業となります。

- ①4月上旬頃開始。温度10～15℃、水量は種子容量の2倍程度。
- ②浸す期間は水温10℃で6～8日、14℃で約6日が目安。
- ③開始2日間は薬剤流出を防ぐため水のかけ流しや循環・交換をしない。
- ④酸欠対策で水の交換を2～3回行う。胚が白く見えたら浸種終了の目安。



◆催芽◆

発芽の種子間差を小さくし、均一に発芽させるために行います。

- ①事前に36～40℃の湯通しを何度か繰り返し、袋内部を均一に温めておく。
- ②30～32℃で約20時間置き、芽を揃えて出す。
- ③水分切れに注意し、芽の長さはハト胸程度を目安に。

※品種により、発芽速度が異なるので、催芽時間は品種によって変える。



◆播種前の準備◆

苗立枯病防除の薬剤を床土に混和する場合は、処理後すぐ播種するようにしてください。苗立枯病は薬剤による防除の他、人工培土を使用したり、温度管理等の育苗管理を徹底することで防ぐことができます。菌の種類により効果のある薬剤が異なるため、薬剤選択をする際は、対象菌種にも注意しましょう。

ピシウム菌：低温多湿・高pHで発生。坪枯症状、ムレ苗を起こす。地面のカビは見えない。
 フザリウム菌：低温や土壤の乾湿の繰り返しによる苗の衰弱により発生。地際部に白～淡紅色のカビあり。
 リゾープス菌：高温（出芽中32℃以上）多湿・厚播きにより発生。地面に白い菌糸が発生する。
 トリコデルマ菌：高温（育苗後期）多湿・厚播きにより発生。白→青緑色のカビが密生。

◆出芽管理◆

出芽は苗の種類により温度条件が異なる（乳苗・稚苗は加温、中苗は基本無加温）ことに注意します。もみ枯細菌病の発生を防ぎ、種子消毒を基本として対策しましょう。

【3つの注意点】

- ① 出芽温度を32℃以上にしない。
- ② 無加温出芽は被覆期間を過剰に長くせず、出芽後の再被覆は行わない。
- ③ 緑化期以降は25℃以上にしない。

苗の種類ごとの出芽方法

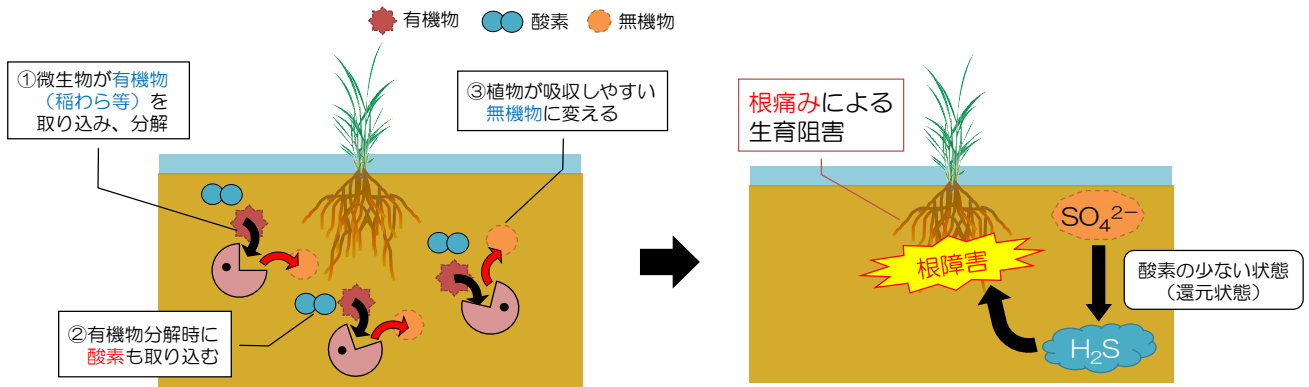
	乳苗	稚苗	中苗
出芽温度	32℃	30~32℃	無加温※
出芽期間	48時間	48時間	—
出芽長	2 cm	1 cm	0.5cm

※加温出芽する場合は、やや低めの温度管理を行う。

◆本田の準備◆

近年は高温により、土壌の異常還元（酸素不足）が発生しやすくなっています。異常還元が発生すると、土壌中の硫黄（硫化物イオン）が根に有害な硫化水素（H₂S）となり、根痛みが発生します。根が傷むと初期の分けつや生育が抑制され、その後の生育にも影響します。異常還元の発生を防ぐために、春の耕起前に排水対策を行い、稲わらの腐熟を促進させてから耕起することをお勧めします。

<微生物による有機物の分解の仕組み>



土壌における有機物の分解と硫化水素の発生原理

春の耕起前に排水対策を！



丁寧過ぎる代かきは土中の酸素不足に

稲わらの腐熟を促進させる作業体系



JA全農あきた公式ホームページはコチラ！

公式インスタ 秋田の農業応援団！



JA_ZENNOH_AKITA

美人を育てる 秋田米【公式】



BIJINAKITAMAI

営農支援部 営農支援課 ☎018-880-1011

Zennoh-akita agriculture+reform
Za・あぐりふぉーむ



JA全農あきた営農情報誌 Za・あぐりふぉーむ
第73号 令和8年3月5日発行

編集・発行 JA全農あきた営農支援部営農支援課 〒011-0901秋田市寺内字大小路207-24 018-880-1011